

アート&デザインによる地域貢献
「坂出アートプロジェクト2021-2022」の企画・実施
Contributing to the community through Art and Design
Sakaide Art Project 2021-2022

藤山 哲朗 芸術工学部環境デザイン学科 教授
戸矢崎 満雄 芸術工学部アート・クラフト学科 教授
かわい ひろゆき 芸術工学部ビジュアルデザイン学科 教授
中山 玲佳 芸術工学部アート・クラフト学科 助教
尹 智博 香川大学 教育学部学校教育教員養成課程 准教授

Tetsuro FUJIYAMA Department of Environmental Design, School of Arts and Design, Professor
Mitsuo TOYAZAKI Department of Arts and Crafts, School of Arts and Design, Professor
Hiroyuki KAWAI Department of Visual Design, School of Arts and Design, Professor
Reika NAKAYAMA Department of Arts and Crafts, School of Arts and Design, Assistant professor
Jibak YOON Kagawa University, Faculty of Education, Associate professor

要旨

本研究は2013年度から継続して行っている「瀬戸内国際芸術祭」におけるアートプロジェクトの一環として実施された。芸術祭の目標は「海の復権」と称し、瀬戸内海の地域・文化の再評価・再生を目指したものである。

2021年度は、2022年4月から開催される芸術祭参加を前提に、作品制作をプロジェクトの主点として、坂出市役所、地域ボランティア、なにより会場である瀬居島の住民の皆さんの協力を得て活動した。瀬居島でのプロジェクトは2019年から続くものであり、前回に比べてより緊密な地域共創のもと進められた。

結果として瀬居島の4か所で4作品の展示を行った。いずれもこの島ならではのサイトスペシフィックな作品であり、海のみならず、山道、古民家、廃校と多様な会場を用いている。厳密には研究助成の期間後になるが、この紀要では各作品についても解説している。

一方、もう一つの地域貢献プロジェクトとして計画していた坂出市内高校とのSDGsプロジェクトについては、高校側の判断により実施するには至らなかった。

Summary

This research was conducted as part of art projects for the ART SETOUCHI. The aim of the Setouchi Triennale is to reevaluate and revitalize the region and culture of the Seto Inland Sea. In this context, the research members have been working on the island area of Sakaide City, Kagawa Prefecture. In the 2021 Project, we created artwork to participate in Art Triennale to be held at the Seijima site starting in April 2022. In the creation of the artwork, we received the cooperation of Sakaide City officials, local volunteers, and residents of Sei Island.

Four works were exhibited in four locations at the exhibition site. An embankment by the sea, a road over the mountains, an old traditional house, and a closed kindergarten.

All of them are site specific works that take advantage of the unique nature and culture of the island as well. On the other hand, the SDGs project with a high school in Sakaide City, which had been planned as another community contribution project, was not implemented due to a decision by the high school, which feared COVID-19 pandemic.

1. プロジェクトの目指すところ

本研究(創作活動)は、これまで継続してきた「瀬戸内国際芸術祭」での活動を継承したものである。具体的な活動経緯は過去の紀要を参照していただきたいが、ここでは簡潔にこれまでの経緯を踏まえて、今回の共同研究=創作プロジェクトの特徴を概観したい。

まず芸術祭自体の大きな目標は「海の復権」をメインテーマとし、瀬戸内海の地域・文化の再評価・再生を目指したものである。その中で本研究メンバーを含む本学は、香川県坂出市を対象に以下の活動を行ってきた。

- ・2013、2016年芸術祭では沙弥島を会場にて、芸術祭実行委員の統括の下に芸術祭会場地域と関わる。
- ・2019年は既定の芸術祭会場に留まらず、香川県関連事業として坂出市と協調し、瀬居島会場にて地域住民との共創を積極的に取り入れた。
- ・2020年は地域の美術作家や民間グループとアートプロジェクトを実施、市内高校との連携も始めた。

これらの活動を発展させ、2021年度の研究では次の2点をテーマ・目的とした。

- ①市内高校との連携SDGsプロジェクトの推進。
- ②2022年春に開催される瀬戸内国際芸術祭の準備・制作。

年度単位では、本研究助成の期間は芸術祭会期前までであるが、この紀要では2022年4月から開催された展示成果も合わせて報告したい。

2. 活動のプロセス

2020年度よりは沈静化したとはいえ、2021年度もコロナウィルス対策に翻弄された。まずテーマの一つである香川県立坂出商業高校との連携プロジェクトについては、高校側の参加体制が整わず、具体的な活動を行うことはできなかった。またアートプロジェクトについても、芸術祭主催者の主体的判断が遅れ、我々としては延期・中止の可能性も念頭に置きながら、予定通りの開催を前提に制作準備を進めた。また、こうした過程の中で、当初想定していた「瀬戸内国際芸術祭」本参加という立場ではなく、2019年同様「香川県連携事業・県内周遊事業」としての参加となった。ただ、これには一長一短があり、芸術祭参加の方

が認知度が格段に大きいのが、関連事業の方が作品内容については自由度が高いという面がある。

3. 瀬居島アートプロジェクト2022 実施概要

- ・会期：2022年4月14日(木)～5月18日(水)
- ・会期中無休、入場無料。
- ・主催：神戸芸術工科大学。共催：瀬戸内国際芸術祭坂出市実行委員会。
- ・会場：香川県坂出市瀬居町。

図1：プロジェクト・リーフレット

今回も、前回2019年度と同じ瀬居島が会場である。プロジェクト名は瀬居「島」と呼んでいるが、70年代の瀬戸大橋開通と並行して行われた臨海開発により市街地との間が埋め立てられ、現在は陸続きになっている。これは2013・2016年に会場とした「沙弥島」も同様である。ただし、両会場を経験して実感している2会場の差として、沙弥島は瀬戸大橋記念公園や海水浴場など、普段からの集客施設がある反面、地域住民は少ない。一方、瀬居島は一般には釣り客が訪れる程度だが、住民は多い。残念ながら

小学校は今年で閉校されたが中学校はまだ残っている。そのため2019年プロジェクトでも瀬居島では多くの地域住民にもアートプロジェクトに参加いただいた。結果として初めは様子をうかがっていたと思われる島民も、芸術祭が始まると積極的に参加していただいた。今回はその人的資産も活かして、さらに活発な制作を行えるよう計画した。

瀬居島は大きく4つのエリア=自治会に分かれるが、前回は竹浦と北浦の2か所を会場とした。対して今回は、本浦「瀬居幼稚園」廃園、竹浦「和田邸」空き民家、北浦「堤防」、竹浦-北浦「山越えの道」、西浦「バス停・駐車場」総合受付と島全体を使いそれぞれに特徴のある場所を用いた。会場へのアクセスについては期間中は関係者以外の車両は島内駐車禁止としたので、一般車は西浦の臨時駐車場に誘導。島内は徒歩または島内シャトルバスを利用。電車での来場はJR坂出駅を起点に通常の市営バスに加え、期間中はシャトルバスを配置。駅からのバスは沙弥島会場も経由し西浦バス停が終点である。



図2：会場構成

4. 作品について

ボタン曼荼羅：戸矢崎満雄 会場：瀬居幼稚園

お大師(空海)の影響が強い瀬戸内の島々から「曼陀羅」を想起した。曼陀羅は「丸い」を意味するので、丸い形状(直径6m)で描かれている。Buttonの語源は「花の蕾」で、曼陀羅も宇宙と花を表している。

素材となるボタンは、SNSで呼びかけて、カラフルなボタンを送ってもらい集め、それらの色を生かすように、○△□を組み合わせてデザインした。

制作はワークショップ形式で行い、ボタンを置き中心から描いてゆく。

参加者の地元瀬居島のお年寄りや坂出市民には、延10日余り作業していただいた。特に坂出市の子供たちが中心となる「おてつ隊」は多数の親子参加があった。

使用したボタンは合計で約6万個。素材は金属、木材、プラスチック、貝など。不要のボタンは時代も生産地も違い、様々な人が使用したものである。作品が大きいと驚く人と珍しいボタンを見つけて楽しむ人が多かった。会場に置いた感想ノートやアンケート葉書には多くのコメントが寄せられた。



(上) 図3、(下) 図4：会場・瀬居幼稚園





図5：制作過程

祝福の音：かわいひろゆき 会場：竹浦・北浦間、山越えの道

さぬき特産の石「サヌカイト」でつくった風鈴 240 個を、島の東の竹浦地区と西の北浦地区を結ぶ山越えの道にインスタレーションした。山越えの道は、島を一周する島八十八カ所巡りの「信仰の道」を東西に横断する「人の道」であり、東の浜に生を受け西の浜に没する、島人の時間が堆積した道である。来場者は、天候や時間帯によって様々な表情を変える空間をたどりながら、島風が奏でるサヌカイト風鈴の古の音色を満喫した。

風鈴は、以下の 16 カ所に設置した。

- 1：瀬居診療所 老人憩いの家、2：正一位稲荷大明神、
- 3：おせき、4：嶋修神社、5：法楽稲荷大明神、
- 6：青翠の小道、7：七五三御崎神、8：岩山観音像(展望台)、
- 9：樹海、10：休祥、11：秘所、12：テンプル、13：終古、
- 14：夕日観望所、15：蛭子神社、16：バンブードーム。

作品制作には、住民および番の州の企業の協力が得られた。特に 12 のテンプルでは、3メートル四方の竹のテラスを制作。人の道の終盤における休憩所とした。14 の夕

日観望所には、西の海を望む 2 つのベンチを設置。どちらも、竹の切出しから磨き、組立までを担当していただいた。

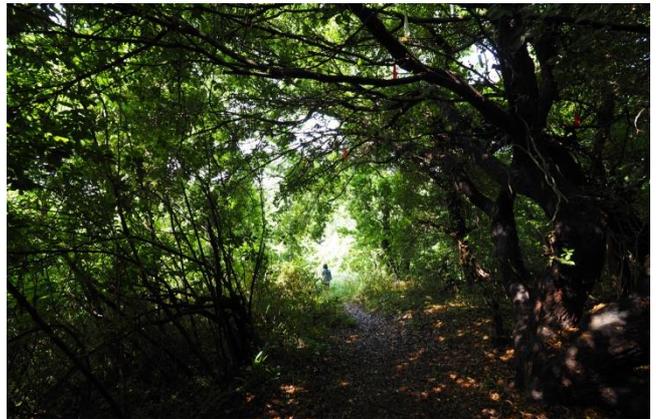


図 6-9：作品風景

瀬居小学校タイムカプセル・ワークショップ

2022年3月で瀬居小学校が閉校したことを受け、4月30日(土)14時から、最後の生徒2名と校長先生が思い出の品を地中に埋めるタイムカプセル・ワークショップを芸工大企画で行った。ランドセルや書道、絵画などをプラスチック容器に入れて校舎の入口脇に埋め、成人式で集まったときに掘り出そうと話し合って決めた。

家の海：藤山哲朗 会場：竹浦・旧和田邸

和田邸は2019年に戸矢崎・尹の展示でお借りした場所。古民家と呼ぶほどは古くないが、瀬戸大橋が開通した頃を思い出させる昔ながらの島の住まいである。この漁港の家ならではの空間を活かしながら、日常の生活空間をアートの空間に異化するために、家の中に海の景色を設えることを企んだ。

今回は3部屋を使い、太洋の間、砂浜の間、深海の間を表現した。太洋の間は海原の写真をプリントした布団を敷いた和室。本来であれば生活感漂うであろう敷き放しの布団であるが、これが青々とした海の風景となる。コロナでなければ布団に入ってもらいたかったところは断念したが、布団の上で泳いでくれたお客さんもいた。

砂浜の間では畳をあげた2帖に白砂を敷詰めた。入口の土間から俯瞰すると白浜越しに布団の海。その奥には元々の襖の松浜が借景となる。砂は自由に触ってもらったので、大人も子供も童心に帰って一心に砂遊びにふけていた。



図10：砂浜の間(手前)、海洋の間(奥)



図11：鑑賞の様子

一転、深海の間は外光を遮った青暗い海の底。和田邸には多用されていた硝子障子を活用して、隣接する部屋の奥からライティングし奥行きを出した。海底の岩は実はゴミ袋で、これも家の中の日用品をアートの素材に転用しようという考えである。タイトルの「家の海」は2016年沙弥島では実際の海の家を建築していることに掛けたもの。



図12：深海の間

しましまのうみ2022：中山玲佳 会場：北浦防波堤

2019年のプロジェクトにて制作した「しましまのうみ」、今回は前回制作した部分の手前にある防波堤(陸側)に更にペイントを施し作品を延長した。このアイデアに至った経緯としては、瀬居小学校が2021年度で閉校になることに伴い、北浦、西浦の住民から小学校の思い出等をテーマに防波堤ペイントをできないかと依頼を受けたことに所以する。前作を拡大するかたちで、引き続き制作テーマである「失われた景色を住民と共に描くことで取り戻す」ということをもとに、地元での聞き取り調査や資料採集を通して、モチーフを小学校や秋祭りの船また踊りや人々の様子とし、前回同様縞柄をベースとしたタッチで描いた。

実際の制作工程としては、防波堤洗浄と下地塗りを坂出市役所の協力のもと、番の洲企業および地元住民の方々と行き、20分の1のエスキースをもとに実際に描いていくペイント作業は北浦を中心とした住民の方々と約1か月間続けて行いながら全長160mの防波堤絵画を完成させた。(一般向けのペイントワークショップはコロナ感染蔓延防止対策発令中だった為すべて中止)。

会期中は天候にも恵まれ瀬戸内海の景色を眺めて歩きながら鑑賞できるサイトスペシフィックな壁画作品となった。

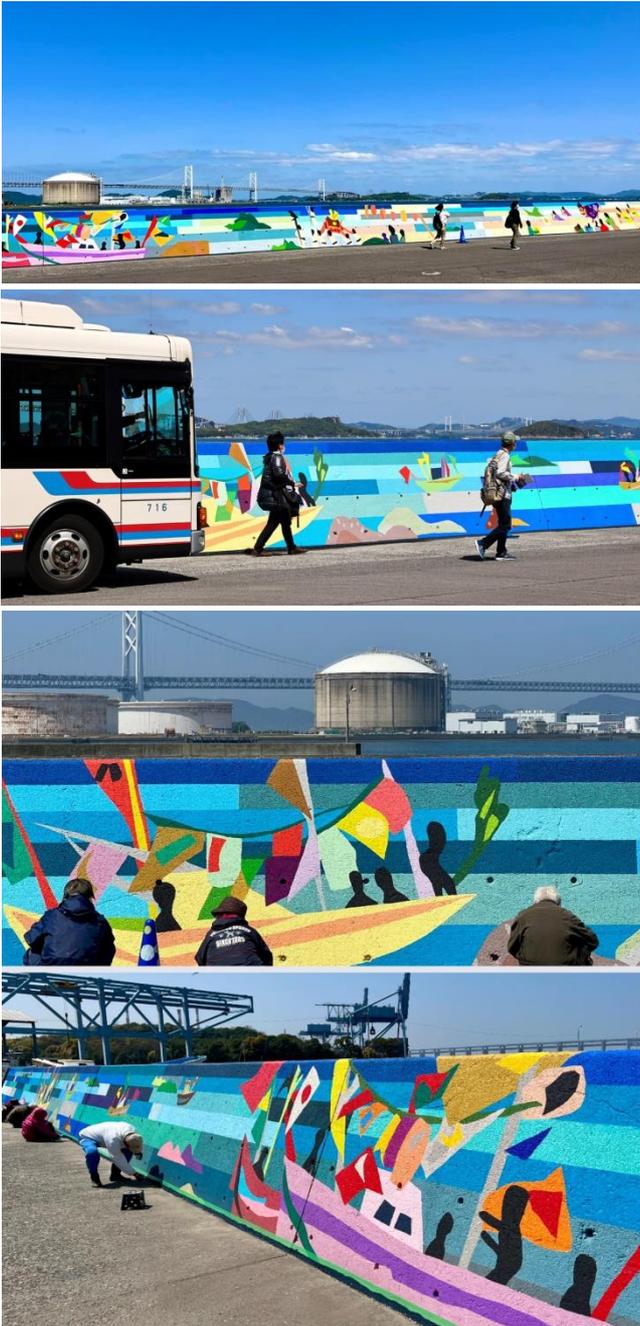


図 13-16 : 会場風景

5. プロジェクトを終えて

今回に限らないが会場が遠隔地なため、作家だけで会場管理を行うことは不可能である。そこで共催の坂出市役所の皆様には大いに力添えいただいているのだが、それにも増して地域の方のボランティアなサポートに助けられている。特に前回2019年にスタッフだった方が今回もサポートしていただけたのは感謝に堪えない。こうした方々は制作過程でも積極的に参加していただけたし、準備中にも様子を見に来ていただいたのが励みになった。

一方、今回はコロナのために飲食が制限されたため地域の方が提供するお弁当などの食材がお出しできなかったのは残念に思っている。このようなアートイベントでは作家と観客とのコミュニケーションにも増して、来訪者と地域の方との交流が重要と考えているからである。作品・作家は芸術祭期間中にしか存在しないが、その地域、そこに暮らす人々はいつでもそこに居る。3年に1度ではなく、また訪れることができるのだ。

最後に瀬戸内国際芸術祭およびその関連事業の中での本プロジェクトの意義について考えたい。前回からこのプロジェクトは芸術祭主会場からサテライトの会場に場を移している。これは芸術祭のプロデュースを行っている東京のアートフロントギャラリーの意向でもなく、全体を統括する香川県の意図でもない。あくまで坂出市のローカルな意向である。瀬戸内国際芸術祭に代表されるアートイベントの主旨の一つが地域の再生にあるのであれば、この瀬居島アートプロジェクトは中央主導の企画から巣立ち、地域自らが主体となってつくりあげたものと言える。次回については全くの白紙だが、我々の参加の有無を問わず、これまでの実績が地域のシビックプライドとなり坂出市民の内発的なアートプロジェクトが継続されることを期待している。